

琉球大学学術リポジトリ

伝統的な言語文化へ興味・関心を広げる授業の試み：
琉球国の時代の和文・漢文を活用した授業実践

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西岡, 華穂子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36826

伝統的な言語文化への興味・関心を広げる授業の試み

—琉球国の時代の和文・漢文を活用した授業実践—

西岡華穂子

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・沖縄県立西原高等学校

1. はじめに

現行の高等学校学習指導要領(平成21年3月告示)の第2章第1節第2款第1「国語総合」の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕には、(1), ア, (ア)の項目に指導する事項として「言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」が示されている(文部科学省, 2009)。国語教師にとって、生徒に古典学習への興味・関心を持たせるのは苦勞することの一つであるが、高等学校学習指導要領解説国語編によると「『伝統的な言語文化への興味・関心を広げる』ためには、古文と漢文だけでなく、古典に関連する近代以降の文章や、伝統芸能、年中行事など、多様な方面からアプローチすることが大切である」(文部科学省, 2010)とあり、教科書に所載されていない題材を教材として活用することが一つの方法として示されている。

郷土の題材を教材化することについて、高木(1996)は「郷土教材を授業化するというのは、ひとつには郷土の文学的風土を知ってほしいからである。もうひとつには教科書教材が生徒の実感からかけ離れていて、興味・関心をもって取り組み難くなっていることからである」と述べて郷土教材の開発とその実践を報告し、米田・松田(2008)は「『地域教材』は学習者の日常に空間的に近いことが好条件となり、『古典に親しむ態度』の第一歩となりうる可能性が高い」と述べ、「古典指導における『地域教材』は古典に親しむ態度を養い、さらには、郷土を見直すという内容価値的な観点からも有益なものと判断できる」と地域教材の有用性を指摘している。

沖縄での古典の授業を概観すると、まず、教科書所載の教材に描かれる世界の、自然の事物についてさえイメージを持つことが難しい生徒たちが多く存在することが挙げられる。そのような生徒たちを前に、教師は解説に時間をかけすぎたり、教師個人の思いを押し付けるような説明を述べてしまったりしがちで、生徒たちは国語便覧等の視覚資料に頼りながら実感の伴わない想像の世界で学習するという流れになる。この状況は、前述した高木(1996)の「教科書教材が生徒の実感からかけ離れていて、興味・関心をもって取り組み難くなっている」という指摘の適例だといえる。幸い沖縄には琉球国の時代につくられた琉球を舞台とする和文や漢文がいくつも残されている。そこに登場する地名や自然物、信仰や地域のあり方などには現代と何かしらのつながりがあるので、それらについて実感をもって学習する機会を与えることで、古文や漢文を読むための基本的な知識・技能を身につけるとともに感性を駆使して古典を学ぶことが可能になるであろう。また、郷土を舞台とする作品を教材とす

課題研究中間報告

ることは、前述の米田・松田（2008）の指摘にあるように、郷土学習の一端を担い、地域社会を支える意識の涵養にも役立つ。

そこで、本実践においては、沖縄に残されている琉球国の時代に書かれた和文・漢文を活用して教材を作成し、それらを活用して国語教科書収載の教材に代替した授業を実践することで、古典を読むための知識・技能の獲得をおろそかにすることなく、感性で触れられる郷土の伝統的な言語文化の学びを提案する。

2. 先行実践

これまで沖縄県で実践された郷土の古典を題材とした取り組みについて確認するために、沖縄県高等学校国語教育研究会研究紀要『おきなわ国語教育』第13号～18号（平成21年度～26年度）での発表内容を調査したところ、発表された研究や実践報告（23件）のうち沖縄の古典的題材としては琉歌を扱った授業が1件あるのみであった。2010年にユネスコ無形文化遺産リストに登録された組踊の高等学校での教材化について、田場（2012）は従来の「読むこと」の指導を中心に据えた実践における組踊「執心鐘入」の文学教材としての不完全性を指摘しつつ、[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]の視点で捉えた教材価値を見いだしているが、未だ田場（2012）の示した視点での実践は多くは報告されていない。高等学校で使用されてきたテキストとしては『高校生のための古典副読本 沖縄の文学』（沖縄県高教組編，沖縄時事出版発行）等の発刊があり，続く『新編 沖縄の文学』（高教組教育資料センター編，沖縄時事出版発行）は，方言，歌謡，琉歌，琉球説話文学，劇文学，日記・評論・随筆，琉球和文学，琉球漢詩文等様々なジャンルを網羅する優れた入門書であるが，文法的な解説や学習ワークなどはなく，古典の正規の授業で扱うには教材研究の負担が大きいいため，関心と素養をもっている教師が個人的に扱うという形が現場では一般的である。このように，授業で扱える素材は豊富に有りながらも，それらを活用した実践は広まっていない。そのため，本研究は，琉球国の時代の和文・漢文を教科書教材に「代替」できるよう実践的に教材化し，沖縄の文学を扱う機会を高等学校の国語教育実践（現場）に提供することを目的に実施する。

3. 教材について

教科書教材に「代替」できる実践的な教材を作成するにあたって、「高等学校用教科書目録（平成28年度使用）」（文部科学省，2015）に掲載されている「国語総合」の古典編（23冊）の教材構成をみると，古文では22冊が説話を，漢文では23冊すべてが故事を入門教材として載録している。説話や故事に共通する特徴として，分量が少なく（古文400文字，漢文90文字を越えない程度）一話完結であること，物語性があり内容の難易度が低いことなどが挙げられ，初学者向きだとみなされている。生徒が感性で触れられる古典としては，平易で親しみやすい内容である方が望ましい。その点，沖縄に残されている琉球国の時代の和文・漢文は，古文・漢文の基本に忠実な平易なレベルであることが多く，複雑な技巧もほとんど見られない。よって本実践で作成できる教材は現行の「国語総合」の範囲を越えないものと判

課題研究中間報告

断される。そこで、高校1年生の古典入門に代替できる教材を目指し、基本文献から原文・語注・書き下し文を書き出してテキスト化し、さらに語注や解説を加えて教材の体裁を整え、適宜口語訳を施して教師や生徒の利便を図るとともに、生徒向けの学習課題ワーク等を作成する。教材を選ぶための基本文献には『球陽』外巻『遺老説伝』と『中山世鑑』および『琉球国由来記』を計画した。その理由としては、官製ゆえ琉球国の中でも相当の知識人の手に成るため基本的知識・技能に信頼が置けること、入門教材に適した説話的なエピソードが多く含まれることが挙げられる。

4. 授業の構想

沖縄について学ぶことに関する高校生の意識を探るため、2016年9月の課題発見実習Ⅱにおいて沖縄県立A高等学校の1年生400人を対象にアンケートを実施した。アンケートは沖縄に関する知識を尋ねる三択クイズの形式で行い、すべての問題の平均の正答率は74%であった。回答した高校生の理解の程度は各質問項目によって様々で、日常口にする野菜の方言名や報道される基地問題に関連する地名の問いには、正答率が80%を越えたが、文学史に関する問いでは33%に過ぎなかった。また、後半に設けた「沖縄または琉球についてもっと知りたいと思いますか？」の問いに対しては、「知りたい」が70%、「知りたくない」が8%であった。「知りたくない」と回答した生徒のうち、理由を問う自由記述の欄には「興味がない」（およびその類似の理由）が55%で最も多く、他の理由として「受験対策が優先で時間がない」という回答も数件寄せられるという結果となった。文学史に関する問いで正答率が低かったことを考慮に入れ、高校の現場で沖縄の文学について扱う機会が少ないことを合わせてみると、「興味がない」の回答の中には興味の対象として沖縄の文学作品が意識されていないことが含まれていると捉えることができる。また、「受験対策が優先」という回答からは、地域・郷土を題材とした教材を使用する授業では受験に必要な知識・技能が獲得できないという思い込みがあることを読み取ることができる。前述した『新編 沖縄の文学』の現場での取り上げ方を鑑みると、教師の側にも同じような思いをうかがうことができよう。したがって本実践では、(受験にも必要な)基本的な知識・技能を身につけられる古典学習となるよう意識しつつも、高校生の興味・関心を広げ、郷土である沖縄への愛着を深められるような実践となることを目指す。同時に、次期指導要領で確実に求められる、主体的・対話的で深い学びを意識した授業を計画する。

本実践の狙いである生徒の興味・関心が広がったかどうかを検証するために、アンケートを利用して生徒の意識調査を実施する。項目としては、古典の学習についての興味・関心だけでなく、教材の内容、授業の進め方や課題の形態について生徒がどのように捉えているかを把握できるような項目を用意する。さらに、古典の学習に関する好悪の理由まで問えるような質問項目を立てて、そこから興味・関心を広げる手がかりを探っていきたい。

主体的・対話的で深い学びに近づくためには、生徒の協同的な学び合いが必要となってくる。そのためには「読むこと」の指導が中心となる古典学習において、どの場面でのどのような学び合いが適切かということについて、また、基礎的・基本的な知識・技能の習得のため

課題研究中間報告

の効果的な言語活動等について、高校の「古典」という科目に限定せずに、「現代文」や小学校・中学校での実践事例なども参考にしながら授業案を構想していく。

5. 進捗状況と今後の研究の方向性

現在、基本文献とする『遺老説伝』（『沖縄文化史料集成6』）から「お水取り」「眠い虫次良」「穩作根子の話」「白銀堂伝説」の教材化を進めている（図1参照）。

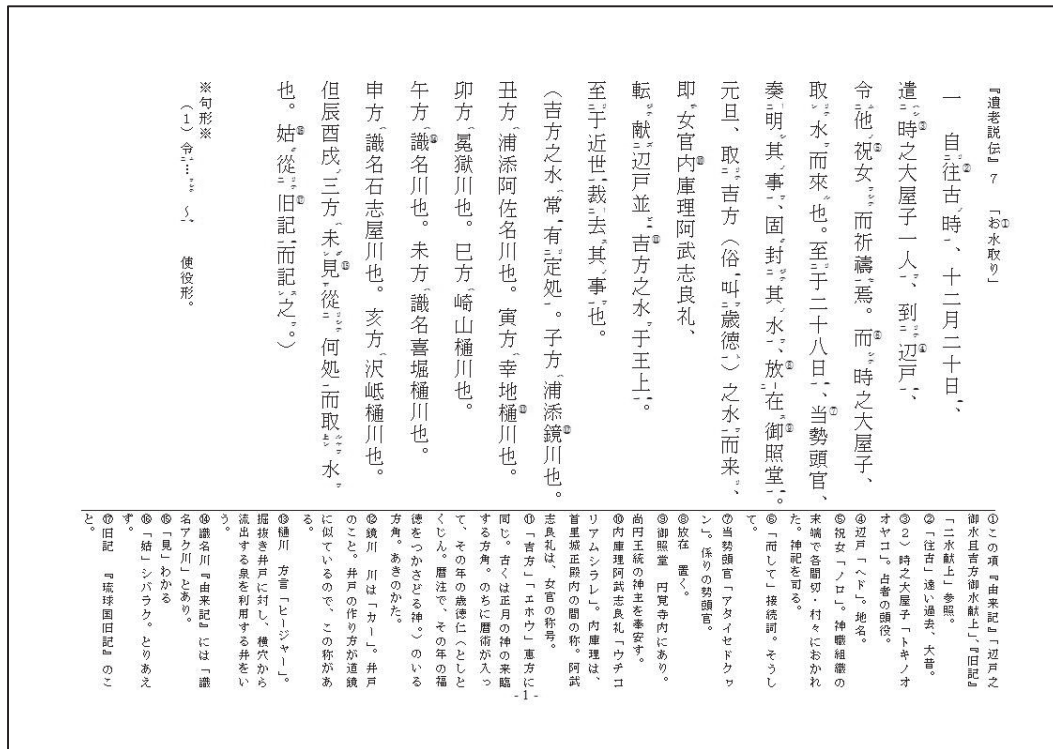


図1 「お水取り」

今後は他の基本文献からの教材化を進め、次年度の課題解決実習に向けて年間指導計画の中での位置づけやシラバス作成に取り組み指導案を練っていく。

6. 文献

米田猛・松田明大（2008）．「中学校国語科古典指導における『地域教材』の開発試論－教材『越中万葉』の開発と実践－」『富山大学人間発達科学部紀要』2(2)，pp. 1-12.
 文部科学省（2009）．『高等学校学習指導要領』文部科学省.
 文部科学省（2010）．『高等学校学習指導要領解説国語編』教育出版.
 文部科学省（2015）．『高等学校用教科書目録（平成28年度使用）』文部科学省.
 田場裕規（2012）．「組踊『執心鐘入』と国語科」『全国大学国語教育学会発表要旨集』122，pp. 155-158.
 高木功（1996）．「郷土教材の開発と課題追及学習の展開」『国語科教育』（43），pp. 29 - 33.